

平成26年度「県と市町の地域づくり連携・協働協議会」(地域会議)  
1対1対談(東員町) 会議録

1. 開催日時

平成26年5月23日(金) 11時00分～12時00分

2. 開催場所

東員町役場西庁舎2階 201・202会議室  
(員弁郡東員町大字山田1600番地)

3. 対談市長名

東員町(東員町長 水谷 俊郎)

4. 対談項目

(1) 障がい者の働く場の確保

障がい者の働く場とは  
障がい者雇用の現状と社会的必要性  
障がい者雇用を阻害するもの  
障がい者雇用を進める戦略  
モデル自治体となるために

5. 会議録

(1) 開会あいさつ

知 事 貴重なお時間をいただきましてありがとうございます。今年度の1対1対談のスタートを東員町から切らせていただくということでございます。

例年は6月から8月ぐらいで、翌年度の予算に向けてということが基本的な主眼でしたが、今年度は、私の任期が最終年度ということもありますので、全般的な意見交換をさせていただいて、今後の県政に活かすということと、各市町の固有の課題の解決に向けてどうのご協力ができるか、そういうことについていろいろ議論をさせていただければと思っております。

今日は、「障がい者の方々の働く場の確保」ということの議論で、これまでも県としてもいろいろ取り組んでおりますが、まだまだ道半ばの部分が多々あります。

一方で、東員町さんでパン工房の『いずみ』さんとか、今日、この後、行かせいただきます『くろがねもーち』さんなど、先端的な取組をさせていただいております。この点について意見交換をし、今後の県政において障がい者雇用が進んでいくような議論をさせていただければと思っておりますので、

どうぞよろしく申し上げます。

本日はどうもありがとうございます。

東員町長 おはようございます。ようこそ東員町へ。1対1対談をやめようと提案したら、一番最初に来ていただいたということで、ありがとうございます。

いろいろ外れるかもわかりませんが、ガチンコでというご依頼もありますので、そんなことでよろしく申し上げます。

## (2) 対 談

### 1 障がい者の場の確保について

東員町長 突然ですが、今、本町では「子どもの権利条例」づくりをやっています。県ができて、今、4～5つの市でできたところもありますが、うちも今やっています。

一昨日、会議が大変なことになってまして。というのは、今年度末に条例を完成させようということで、今、侃々諤々やっています。条文までいきまして、まずは前文をどうするか。前文に思いを入れたいということで、大人がこういうのでどうかという案をつくって子どもに出しました。子どもがそれを見て、「こんな難しいこと」とか、「こんなの大人が勝手に考えたんでしょ」とか、いっぱいダメ出しが来ました。

その前提として子ども委員会と大人委員会と2つでやっています。大人委員会でその子どものダメ出しを聞いて、「それではとりあえず子どもにつくってもらったらどうか」という話になって、子ども委員会に振ったわけです。子どもが一所懸命それを考えて、4つの班に分かれてそれぞれつくって、それを合わせて完成品をつくってきた。それを大人委員会の素案づくりチームというところで見ると、子どもの思いを見ながら、こういう表現は良くないとかいろいろ変えて案をつくりました。大人の委員会も一所懸命子どもに刺激されて、一昨日、子ども委員会で作ったものを基本にして案をつくった。これを子どもたちに見せて意見をもらおうかという話になりかけたときに、子ども委員会の担当しているグループの人から、「なんでそんなものを子どもに見せるのか」という話になりました。一所懸命、子どもの思い、子どもたちが書いてきたものが網羅されているんです。入れてそれを子どもに見せていくということで、そこで大激論になって、今、大変なことになっています。だけど、こういうことをやりながら子どもの権利条例というものをつくっていかうということなんです。大人というのはこういうものです。ですから、

多分障がい者雇用なども観点が同じようなことではないかと思います。

この前、知事にもお話をさせていただきましたが、我々が誤解していたのは、障がい者については、障がい者対策・障がい者施策については、当然国費の分野であって、どうしたら障がい者の人たちが我々と同じようなところで生活ができるかというのを考えていこうと。そして、彼らにとって不自由な部分を我々が支援していく、という考え方でずっと来ています。考え方自体は当然間違いではないと思います。

ところが、そこが壁になっていることを気がつかないんです。先ほどの子どもの権利条例づくりでも、子どもがつくったものに対して意見を出すのはいい。だけど、それを大人が「子どもの気持ち、子どもの言葉そのものを斟酌してちゃんとつくった」といって対案を出す。これが大人の考え方です。そこが子どもたちにとって壁になっていることを大人は気づかない。

先ほどの福祉といえば、障がい者の皆さんのために、障がい者の皆さんが同じ生活圏で生活できることを支援してあげようとするのは間違いではない。間違いではないが、これが壁になっていることに気がつかない。ここがやはり問題だと思います。ですから、おそらく障がい者雇用はなかなか進んでいかないと思います。

この数字は前も知事にお話をさせていただきましたが、日本で約 800 万人の障がい者の方がみえる。発達障がいなどを合わせれば 1,000 万人を超える。その中で少なくとも 200 万人ぐらいは働ける方がみえる。だけど、実際、日本中で今、雇用されているのは、あるいは働いているのは 18 万人しかない。この数字を見ると、いかに壁が高いかということが分かると思います。

ですから、我々東員町としては、そこに早く気がついて、なんとか障がい者の人たちが本当に働ける。本当に働けるというのは、最低賃金をもらって、そして、きちっとした日数を働いてちゃんと自分たちが生活できる、そういうものを得ること、これが大切です。働く場所があればいい、働ければいい。だけど、障がい者の方は、働いても今、福祉施設などで働いても、大体 1 万円とか、多い人で 2 万円とか、そんなような状況が起こっている。これは、私は人権侵害以外の何物でもないと思っています。本当に彼らの人権を尊重して、彼らが本当の意味で働ける場所をつくっていかねばならないと思っています。

そんな中でいろいろご支援をいただきながら、今、本町で考えているのは、耕作放棄地の活用です。1 箇所、約 7 ~ 8 ヘクタールあります。そこを国のお金をいただいて耕作放棄地対策で整備をしつつあるところがありまして、その場所を活用して障がい者の皆さんに働いていただける場所をつくろうと。

具体的には、そこへある企業が進出していただいて、東員町に現地法人を

つくっていただく。A型事業所というものを開設していただいて、そこで障がい者の人を雇う。農業ですから、地元の人との協力が要りますので、経験のある高齢者の人たちも一緒にそこへ雇用していただいて、アドバイザー、あるいは、それを手伝っていただく方として雇っていただく。障がい者とコラボで農業をやっていく。生産されたものはその会社が一括して全部買い上げてくれるというシステム構築をやりかけています。

これができるのは、その土地が虫食いみたいに使ってみえるところもあるので、それが少なくとも3ヘクタールや4ヘクタール使える場所がまとまったとしたら、その可能性が出てくるということです。今、担当課で現地に入って地主の方にあたっていただいて、農地がまとまるかどうかやっています。それがまとまれば、改めてその会社とお話をさせていただきます。農業、特に障がい者雇用を全面的には出せないかもわかりません。というのは、障がい者のためにおれたちの土地を提供するとかいろいろありますから。本質は障がい者の人をそこで雇っていただいて、そして、周りの地域の特に高齢者の雇用の場所にもなるという取組で地域づくりをしていきたいというようなことを思っています。これからの障がい者雇用、特に三重県は雇用率が低いということを考えますと、そんなことも考えていかなければならないのではないかと考えています。それが1つ。

もう1つあるのは、この前、町内のある程度従業員のまとまってみえる企業7～8社に来ていただき、講演を聞いていただきました。その中で少しそれに反論を示された企業もありますので、その企業さんなどを一度我々も訪問して、そこで障がい者が雇用できる環境が整えられるかどうかという議論をこれからしていきたいと思っています。その町内にある企業の中で障がい者雇用が進んでいくという。方向として企業提案をこれからしていこうというのは、その工場なり会社の中に特例子会社をつくっていただいて、そこで障がい者の雇用をやっていただく。そうすることによって、いろんな待遇の面も考えていけるんじゃないか。そういうことをこれから話し合っていこうとしています。とにかく、東員町の中でいろんな場所で障がい者雇用が高まってくるような働きかけを、これからしていきたいと思っております。

知 事 別の分野の話で水谷町長と話したことを、さっきのお話を聞いて思い出したことがあって、そういう意味では町長のおっしゃることはいつも一貫していると申し上げたいと思います。

先ほどの壁の話からいきたいと思います。僕自身が障がい者福祉とか障がい者施策にしっかり取り組んでいこうと思ったり、今、人生経験上、知事になる前も多く施設の訪問させていただいたりして、いろんな方々の想いに

少しでも寄り添えるようにと思ってきたきっかけが一つあります。

そのきっかけは、ある施設で七夕がありました。親と入所している障がいを持っている子どもと一緒に短冊に願いを書く。お母さんは早々に書いて笹に付けた。その障がいを持っている子はなかなか書かない。施設の人が何度も促して、やっと書いた、ふたを開けてみたら、その子が書いたことは、「お母さんより一日早く死にたい」と。お母さんが書いたことは、「娘より一日長く生きたい」と、そういうことを書いた話を聞いたことがありました。

人間って弱いし面倒くさがりで楽をしてしまうので、その人が置かれている状況や、本当にどういう思いを持っているのか、そういうのに思いを馳せたり想像したりすること、前に水谷町長から想像力ということ一度指摘されたことがあって、県庁の仕事の事業の先にいる人たち、あるいは、その事業をやることによってどういうことが起こっていくんだろうという、想像力が貧困だというご指摘を以前、受けたことがありました。それを、もう一回思い出したんです。

壁という部分についても、今、町長がおっしゃったように 100 点はないにしても、努力・想像力を働かせて、そう人たちの壁を取り払う。そういう人たちの本当にどういう想い、僕は七夕の短冊にそこまで書く、そういう想いがあるということ。お母さん方と懇談したら、自分が死んだら心配だという話をよく聞きましたが、本当にそういう想いのところまであるということを改めて知って、それ以来、自分自身もそういう障がい者の皆さんの少しでも力になれるような、寄り添っていけるようなことをやっていきたいと思ってやってきました。先ほど町長がおっしゃっていただいたように、壁を完全に取っ払えなくても、そういう努力をし続けていくように、私だけじゃなくて、職員もしっかりしていきたいと思えます。

そして、もう1つは、前、「すごいやんかトーク」というのを伊勢のうどん屋さんでやったとき、玉城わかば学園のPTAの会長がおられました。そのお母さんは、親としての壁、心理的な壁といいますか、自分の子どもは何もできないとっていて、外に出すのも働かせに行かすのも嫌だった。でも、玉城わかば学園の先生たち、あるいは玉城わかば学園を經由して実習を受け入れた企業の人から、自分の子どもはこんなたくさんの方ができるのかということ教えてもらった。親においても心理的な壁があった。それをどう取っ払っていくかというのが、先ほど町長がおっしゃっていただいたように、障がいを持った人たちが人権などを侵害されないような形で、本当にちゃんと想いを持って働いていけるようにするには、多くの関係者の壁を取っ払っていく必要があるということも、そのPTAの会長さんもおっしゃって

ました。

なので、この壁の部分については、僕の思いのなところで大変申し訳ないですが、完全 100 点はないにしても、町長がおっしゃった部分には僕も本当に共感しますので、そういう努力をみんなですっかり続けていきたいと思っています。

そして、2点目の実際に具体的な企業の進出、働く場をつくっていただくことにつきましても、我々もしっかり勉強させていただきたいと思います。三重県でも今、いろんなパターン、特例子会社も生まれてきています。例えば病院のシーツとかベッドを替えたりするようなこともあれば、農業系のもものもあったり、あるいは、電装部品の運ぶ箱の洗浄というようなこともあります。今、少子化対策をいろいろやっていますが、子どもを持っている家庭、あるいは家族がそれぞれであるように、障がいを持っている子どもそれぞれなので、そういういろんなパターンの、いろんな地域にいろんな働く場が生まれてくることは、我々も大変歓迎すべきことだし、ありがたいことです。我々がいろんな働きかけなどご協力できることがあればしっかりやっていきたいと思ひますし、我々も学んでいきたいと思ひます。

後でも少し時間があれば話そうと思ひますが、地域全体の障がい者の皆さんに対する理解ということも、そういう推進協議会みたいなものも立ち上げていこうと思ひていますが、そこには東員町さんからメンバーに入っただけのような準備で今、働きかけをしていると聞いております。そういう理解を進めていくことにもつながっていきますし、いろんな地域でいろんな働き方ができていくような取組を共にしっかりとやらせていただければと思ひます。

東員町長 僕は、短冊の話ですが、子どもさんはぜひ親よりも長く生きたいと感じてほしいんです。そして、そういう社会を我々はつくっていかねばならないんです。一日早く死にたいということは、我々社会に責任を負っている者の、それこそ大きな責任だと思ひます。ですから、障がいがあっても、親より長く生きて大丈夫と思ひするような社会をつくっていかねばいけないと思ひているんですね。

ただ、今、知事が壁の話をされましたね。さっきの権利条例の話ですが、大人委員会の中で喧々囂々の議論をしているんですが、ほとんどの人は分かってない。「子どもの意向を全部入れた、子どもたちにとっていいというものをつくったんじゃないか。なぜ、これを子どもに出したらいけないか」という、ずっとそれです。子どものつくったものを大人が咀嚼して少しでも変えたんです。これは子どもを否定していることになるというのが、どう

しても大人には分からない。では、何もしないほうがいいのか、子どもにづくってもらえという意見も出ました。それは完全に子どもを無視していることになります。だから、子どものつくったものを見てきちっと、このところはこうしたほうがいいのか、こういうふうにしてもう少し考えもらったらいいというような意見を出してあげることが、ちゃんと子どもに向かい合うことです。

ところが、大人は、なかなかそれが分からないのが現状です。多分ここに見える方も分からない人はかなりいると思います。多分私も何年か前だったら分からなかったかもわからん、というようなことだと思います。それが壁なんですね。

私が見学に行った四国の工場で何が起きているかというところ、そこには40数人の従業員、社員がいます。その中の約30人が障がい者です。朝8時から5時までと、午後の3時から12時までの完全二交代でやっています。こんなことを僕も考えられませんでした。

なぜ、考えられなかったかというと、これはいつも福祉関係の方、非常に福祉の造詣が深い人、ご理解の深い人、それから親御さんから話を聞いているから分からないんですね。「完全二交代？とんでもない、うちの子どもはそんなことができるわけがない」と。とてもじゃないけど無理だというのが親の全員の意見です。それを一人ひとり説得されて、結局何が無理か、何ができるか何ができないかというのを一つひとつ親と議論をしました。最後に無理だという親の抵抗が、「この子は夜通うことはできません」と。「そうしたら、送迎します」と。送迎しますと言われたら、それ以上反対できなくなる。それで、渋々、二交代が始まった。最初はいろいろあったみたいです。例えば8時ぐらいになってくると、出てきた子どもたちが眠たくなる。それを社長が怒ったわけです。親も呼び出して「どんな生活をさせてるのか。普通の人間は11時、12時ぐらいまでは大丈夫だろう」というようなことである議論しながらやっていって、今、非常に順調に来ています。

面白いのは、例えばその会社でミスが起こる。健常者と障がい者と一緒に働いていますが、ミスが起こるのは必ず健常者です。障がい者は一つのミスも今までにないそうです。それから、機械でケガをする、これも必ず健常者です。障がい者はケガをしない。そんなことです。私も見に行き、一緒に働いているんですが、どの子が障がい者でどの子が健常者なのかさっぱり分からないような働き方でした。

ですから、彼らは今、非常に充実しているんです。大体そこでは給料、月額一番少ない子で15万円ぐらいもらっているそうです。非常に生き生きとしてきているし、そして、どうも障がいの程度が軽くなってきている。改善し

てきている傾向が見られるそうです。

これは今まで福祉施設にいる子たちを見ていて、本当にそうなのかなあと  
思うような光景でした。すごい場所です。一度皆さんも見に行ってください  
といいなとお薦めします。

ですから、多分親も分かっているようで分からない。福祉施設の関係者も  
分かっているようで分からない。結局、社会が分かっているようで分からな  
いのは、この壁です。ですから、壁を取っ払うとかいうのではなく、見に行  
ってどういう状況が起こるかということを考えていただきたい。

だから、今、日本は生産人口が減ってきていますね。生産人口が減ってき  
ているのを、この障がい者の人たちの 200 万人で埋めることだって私は可能  
だと思います。女性の社会進出、当然です。だけど、障がい者の社会進出、  
これは絶対にやるべきです。200 万人の労働者を確保できるわけですから。

障がい者の方も、非常に社会に出て喜びを得るわけです。同じ生活をする  
ので、非常に印象的だったのは、一緒に働いています。そうすると、障がい  
者の子が健常者の子に向かって、「あんたたち、手帳を持ってないの？」と  
言われた。障害者手帳のことです。あなたたち持ってないの。これを持って  
いると得だよ。電車に乗るとき安くなるし、高速道路はあまり運転しないか  
ら知らないけど、ともかくあっちこっちで映画を観るのも安くなる。あっち  
こっちで安くなるんです。これを持っていると得だからもらいに行け！と言  
っているそうです。それくらい健常者と障がい者の間の壁は丸っきりないん  
です。

なぜかという、その会社の人たちはみんな福祉というのもこれっぽっち  
も知らない。知らないからこそできる。ということは、別に必要ないと思  
いました。そういうところでは、ですから、本当に壁というのは分からないう  
ちになかなか取り除けないもの、これが壁です。ですから、そういうものを  
意識しないような雇用形態、そして、それこそその子たちの社会進出、能力  
があるのにそこで止めてしまうのは人権侵害です。それ以外の何物でもな  
いと思いますので。我々行政の責務として、そういう方たちが働ける場所をき  
ちつつくってあげる。やはりハンディを持っていますから、完全に我々と  
平等ではない。だけど、そこを少し支援してあげれば同じレベルまでくるん  
だ。ここを支援をするだけでいいわけです。あと、引っ張り上げる必要もな  
ければ、過剰なことをする必要は何もないんです。ですから、少しお手伝  
いをしてあげるといいと思うので、行政としてはそういうお手伝い  
をしていく。そして、誰もが一緒になって働けるような社会をつくっていく、  
それしか私はないと思っています。

知事 さっきの福祉に詳しい人ほどという、知らん人のほうがという話、私も直面したことがあります。大阪のあるIT企業が精神障がい者の人たちを中心としたA型事業所をやっているところがあって、その人たち、私も見せてもらいました。最初は単にデータ入力だけからという感じが多かったんですが、データ入力だけではなく電話を普通にコールセンターとして受けている子たちもそこにいまして、正に誰が障がいを持っている人で、誰が障がいを持ってなくて、そのリーダーとなって一緒に仕事をしている人が全く分からないようなA型の事業所でした。私がその施設長さんに聞いたら、自分たちは福祉の専門じゃなかったから、社会福祉法人じゃなかったから、ITの会社だったから、こうやってうまくみんなやってもらえるようになったんじゃないかとその施設長さんが実感を込めておっしゃっていました。先ほど町長がおっしゃっていた例と同じだと思います。

あと、そういう成長していく姿、障がいを持っている子たちでも働いていると、働く中でどんどん成長していく、戦力化していく、そういう部分についても、奈良のレストランみたいなところと、あと、レトルトカレーのパックを作っているようなところとかありました。そのカレーも私も大量購入してきましたが、非常においしいし、質も高い。働くときから中身は知的障がいの子たちとかで数字に弱い子たちがいるので、グラムの量り方のことだけうまく工夫をしてあげるとか、先ほど町長がおっしゃっていたちょっとした工夫といいですか、そういうのをしてあげること随分成長していくという前提を見たことがあるとか感じたことがある人と、そうじゃない人で差があるのかと思っています。今回、ステップアップカフェというのをやってきましたが、そこは正にそういう理解を進めていくというか、よく知ってもらうという狙いがあります。

実は去年の5月に県内で1万4,000社を対象として企業に障がい者雇用についてアンケート調査を取りました。なんと75%の人たちが、自分たちの会社に障がい者の人たちができる仕事がないとおっしゃいました。

では、その人たちはどういう障がいを持っている人たちを想像しているのか。自分たちの会社の仕事をどこまで因数分解してみたことがあるのか。障がいを持ってない人でも得意・不得意があるように、障がいを持っている子にも得意・不得意があって、それぞれの得意のところの仕事のやり方を、ものをつくるのかサービスを提供するのかそれぞれですが、その中でやっていくことの努力を積み重ねずに、できる仕事がないと75%の者には言ってしまう。その現状には、先ほどの壁の話が、実際に障がいを持っている子たちが成長していく実感を目の当たりにしたことがある人との差が非常に大きいと改めて思いました。

そういう理解を、先ほど町長が、町の現場として、ちょっとした努力、思いつき引き上げてあげるのではなく、その子たちが働きやすいちょっとした努力をやっていくとおっしゃっていただいた。それは大変ありがたいことなので、我々も更にそっちの理解を進めていく、広域、県全体と地域社会として更にそういう理解を進めていく努力も、よりやっていかなければいけないと改めて思いました。さっき町長が見に行ったらいいということをおっしゃいましたが、やはり一回見ると全然違うんですね。そういう障がいを持っている人たちの状況を。なので、我々県庁職員ももちろんですし、多くの人が日頃から一緒にいる状況の中で感じてもらえる地域づくりというのをしっかりやっていきたいと改めて思っています。

東員町長 職員の皆さん、ぜひ一度、見に行っていただきたいと思います。また情報は言いますので。

そこで役割分担しながら働いています。たまに手が空くことがある。ずっと見ていたら、障がい者の子がフラフラッと動き出したんです。私本当に自分でいけないと思いますが、サボりに行くのかなと思ってしまった。非常に申し訳ないんですけど。実は違うんです。隣の部署へ行ってそこで手伝うんです。誰も手伝えとも言わないし、手伝えてくれとも言わないし、そんなこと何にもないんです。だれもそんなことを言ってない。だけど、行って隣のを手伝うんです。健常者の人が本当にやりますか。我々役場で働いていても、隣が忙しくて手伝わない場面もたくさんあります。みんながみんなと言っていないですが、あります。だけど、誰がそんなことを教えたのかといたら、違うと言うんです。自主的にやっているらしい。そんなことになるんです。びっくりしました。そういう働き方ができている。いかに自分たちが充実しているかということだと思えます。

その社長がここへ来てくれて、これから行ってもらう『くろがねもち』で昼食を取っていただきました。『くろがねもち』で2人、障がい者の子が働いているんです。それを見て社長がしつけが悪いといってむっとしているんです。それ以上は言われませんでした。自分とこだったら、その子たちを当然怒っていると。これはやはり福祉施設の中で働く、自然にこれ以上は無理ではないか、ここまでは求めてもこれ以上は求めても無理かなという意識が働いているんですね、そこに。福祉施設だからという、福祉施設だから流行るよとかそういうのはやめようとは、施設の理事長なんかにも言っただけですが、結局、そういう意識が無意識のうちにみんなに働いているというのがあるんじゃないか。

我々も問題です。行くほうもそれを許容しています。だから、その子たち

は成長しない。仕事をしつけてきちっとできるようにしてあげれば、その子たちが成長していくと思いますが、なかなかそこが壁だと思えます。ですから、福祉施設の中の就労ということでは限界があるかと私は思っています。ですから、福祉施設ではない本当の就労の場をつくっていかないと、いつまでも障がい者の人たちの人権侵害をしたまま、行政はどんどん進んでいくことになってしまうのではないかとこの危惧をしています。

知 事 今の町長がおっしゃっていただいたので、私も多くの順調にしている働く場は、先ほど町長がおっしゃったように、「障がいを持っている人が作ったものだから買ってもらう」とかではなく、「良いものだから買おう」となっています。

この前も有楽町のある百貨店の展示スペースに、徳島県の障がいを持っている子たちのNPOの皆さんが共同受注みたいなのをしていました。ある東京のデザイン会社と組んで商品を出品していたんですが、どこにも障がいを持った子たちが作りましたと書いてないんです。普通にセンスのいい物が売れてたので、平日の夕方でしたが、若い女性たちは普通にたくさん買っていたり、ついでにウィンドウショッピングもしたりして、なんの違和感もなくやっておられた。

あと、うちがステップアップカフェの例の一つとして参考にした奈良のカフェのところのセンター長みたいな女性の方も、良い物しか置きませんと。その代わりに、毎月その施設を全部回って徹底的にやりますと。ここがあかよね、これを良くするためにはどうしたらいいかみんなで考える。それを徹底的にやると。良いものになったら合格と。その結果、そこにも別に障がいを持っている人たちが作りましたと書いてなくて、カフェに来られた人は、普通に見てかわいいといって買っていく。そういう形の場というのをたくさん増やしていくことが改めて大事だと思いますし、今後、働く場の施策をやっていくうえでは、そういう部分をしっかり留意しながらやっていきたいと思えます。

### (3) 閉会あいさつ

知 事 私自身も町長がおっしゃっていたこととは違う事例ではありながらも、こういう部分が大切だと思っていたところを、改めて町長に気づかせていただきました。いろんな事例も教えていただきましたが、これからも一緒になって取り組んでいきたいと思えますし、そういう現地の部分も見たりやっつけなければと思いますので、どうぞよろしくお願いします。今日はありがとう

ございました。